いただき、クラスターを出さないように万全の感染症防止対策を実施いたしました。

参加者は当初約5000人を見込んでおりましたが、コロナの影響で事前参加者のキャンセルも出て、最終的には約2500人の参加になり、少し寂しい学術総会となりましたが、各セクションで活発な討論がなされ活気ある学術総会となりました。

さて、近年の医療マネジメントにあたっては、情報の管理・分析、その有効活用が大きな課題となっています。なかでも公的医療ビッグデータの活用が重要なポイントになってきました。情報を制するものはマネジメントを制する、その典型例がDPCの開発と厚労省のNational Database(NDB)などの情報公開による分析と活用であると思われます。DPCデータの活用の実例としては、クリティカルパスの評価や診療実績、Quality Indicatorのベンチマーク比較、評価等々が挙げられます。

一方わが国の“未来投資戦略2018”に記載されているように、世界では、ICT機器の爆発的な普及や、AI、DX、ビッグデータ、IoT等の社会実装が進む中、社会のあらゆる場面でデジタル革命が進み、デジタル新時代の価値の源泉である「データ」をどう生かすかが大きな課題といえます。医療に限らずビッグデータ革命は、示された数字にとらわれるのではなく、主体的にビッグデータを扱い、活用することを意味しています。

今、日本の医療は厚労省の指導のもと、地域医療構想の実現と地域包括ケアシステムの構築に邁進しています。地域医療構想では病床の機能分化・連携の掛け声のもとに病床機能報告制度が始まり、2025年に向けてビッグデータに基づいた予測必要病床数が提示されています。病床大再編時代の鍵を握るデータの活用には、人口、病床というマクロな視点から、ベッドサイドの医療の質というミクロな視点を紐付けることができる医療者の進化が不可欠といえます。そのような検討の中で過剰な急性期病床、足りない回復期病床が指摘され、病院は今、大再編時代を迎えています。その大再編時代のカギを握るのは、データ活用といえます。一方、質の高い医療の提供は、我々医療者の使命です。超高齢社会の進展で、医療のみならず、質の高い医療・介護を実現するため、医療・介護連携も極めて重要な使命になってきました。こうした使命を果たすためには、今まで以上に健全経営の実践は欠かせません。そのためにはマスの中でとらえられた多角的、かつ的確

会場風景

なビッグデータの分析が必要であり、今まさに大きな飛躍(Leap)をもたらす「病院ビッグデータ革命」の必要性に迫られています。

そこで第22回日本医療マネジメント学会学術総会で、「病院ビッグデータ革命」の必要性を掲げ、医療の質向上を目指す学会会員の皆様方とこのテーマについて広く、深く考えたい――。そこからあらたな医療マネジメントの方向性が垣間見えてくるのではないかと思い、今回のメインテーマを「病院ビッグデータ革命～データ活用による「医療の質」「医療・介護連携」の飛躍(Leap)を求めて～」とさせていただきました。

基調講演、会長講演のほか、招待講演３題、特別講演３題、特別企画１題、教育講演６題、教育セミナー２題、シンポジウム12題等のプログラムを実施いたしました。当初、市民公開講座を予定いたしておりましたが、感染症拡大予防の観点から、一般市民の参加をとりやめ、学術総会参加者対象の招待講演に変更いたしました。

10月６日の開会式には、三日月 大造滋賀県知事よりビデオレターで祝辞を賜り、また門川大作京都市長にご参列いただき祝辞を賜りました。グローバルMICE都市として京都市は年間300件以上の国際・国内会議が開催されておりましたが、2020年は新型コロナウイルス(COVID-19)の影響で数件になっており、学術総会の現地での開催を温かく歓迎していただきました。

開会式に引き続き、基調講演では宮﨑久義理事長より「学会活動の展望を考える－現状をふまえて－」をテーマにご講演いただきました。「学会会員数が年々増加しているとともに、様々な職種が参加し、共通の課題を出し合い、解決を目指すことが当学会の目的である。」と述べられ、「一般演題で取り上げられるテーマについても、前回京都で開催された９年前とは大きく変化している。「医療マネジメント手法」と分類される演題